



子育てとキャリアアップ

九州大学の新留先生よりリレーを引き継ぎました中央大学理工学部応用化学科の片山です。新留先生のような高尚な化学の話はありませんが、お付き合いいただければと思います。このリレーエッセイでは、若手研究者が執筆することが多いせいか、度々子供ネタが紹介されており、6歳と3歳の娘がいる私も、苦労話や楽しい話に共感しながら読ませていただいていた。上の子はボストクでアメリカにいるときに生まれた子で、子守で四苦八苦しているころ街を歩いていたおじいさんが子供を連れて散歩しているのを見て、「あの子幾つくらい?」「3歳くらいかな。」という会話の後、あのぐらいに成長するとだいぶ手がかからなくなるんだな、と妻と話したことを思い出します。今や、下の子が3歳を迎え、本当に忙しい子育て時期がやっとすぎたことを実感しているこの頃です。

中央大学理工学部は、数年前産学連携教育による女性研究者・技術者育成プログラムなるものに採択されており、女子学生のキャリア支援を進めてきています。応用化学科は年々女子比率が増えてきており、現在では3割程度が女子学生です。そんな中、ファカルティーには女性はおらず、他大も同様でしょうが、女性には門戸の狭い職場になっているようです。全国的に化学系では、学内の意思決定がなされる場所に女性をいれようという流れなのか、最近は女性を積極的に採用するような文言が付いている公募を見かけます。

ファカルティーに応募しようとする時期は、多くの場合子供のいる人にとって、子育て時期と重なります。仕事を切り上げて、保育園には6時ごろに迎えにいかないといけません。そのあと、子供の寝るまでの時間は、食事・洗濯・寝かしつけなど、人によると思いますが、仕事している時間よりもきつい時間が続き、へとへとになって寝る、というご経験を持つ方も多いのではないのでしょうか。このような生活をしながら、ファカルティーを得るのに足る業績をあげることは、そう簡単なことではありません。現実として、女性のファカルティーが増えない要因は、このような事情が大きいのではないかと思います。

大学はある意味、学生から社会人になるところの橋渡しの期間だと思います。現状、女子学生がこれだけ増えている中、その学生を教える人たちの仕事が、女性のなかなかつけない仕事になっていることは残念なことです。学生の近くにいる大人だけに、人生のロールモデルとなるような人が増えたほうがよいのにな、と度々思います。ただ、実際の公募の競争は熾烈です。それなりの業績をあげていないとなかなかポジションを得るのは難しいです。それでも、子育て世代のファカルティーを増やしていくためには、多少の業績ロスを差し引いて、考え方や人となりで審査するようなことが必要なのではないかと思えます。

微力ながら、今年、私は保育園の父母会の会長の職を

引き受け、様々な父母の方と交流を持つ機会を持ちました。最近では、ワークライフバランスを考える父親も増え、父親が主となって子供の世話をしている家庭も増えてきています。今も子供には母親が必要という母性神話なるものがあります。そういうことがあったとしても、子供と直接接すること以外にもやることは盛りたくさん。料理・洗濯・おむつ替え・お風呂・本の読み聞かせなどなど、できることはたくさんあります。よく考えると化学とかかわりの多いことが多いんです。料理はある意味究極の化学反応です。さじ加減一つで、味の良しあしが決まるところなんて、あの人でないといけない測定や合成なんて実験そのもの。洗濯では、洗剤に含まれる界面活性剤を眺めたり、洗剤のどんな成分が環境に残存し汚染につながるか、なんて考えていると、なかなか興味深いものです。最近の洗濯機は昔の洗濯機と違って回転数がずっと少ないのに汚れは落ちるんですね、それって洗剤の進歩もありますが、混ぜ方ひとつなんです。これって化学工学ですね。おしっこのたくさん詰まったおむつを眺めていると、なんて吸水性能だと驚かされます。あれだけ水分を含むのに表面はさらさらなんですすごい。言うまでもなく、高分子化学の技術の結晶です。化学にかかわることだけでなく、子供の本を読んだり、子供と話をしていると新鮮な視点や先入観のない視点は研究にすごく生かされるのではないかと思える時があります。ちなみに私が一番学んだのは、しっかり待つこと、実験は往々にしてうまくいかないことが多いもの(特に学生に任せていればなおさらです)、それをイライラしないで待てるようになったことです。

私は東大工学部の分析系研究室の出身です。そこでは、研究以外のこと、政治・スポーツ・酒・恋愛、いろんなことが議論になる研究室でした。楽しくも厳しい研究室でした。あるとき、男女平等社会(今でいう男女共同参画社会でしょうか)という真面目な議論がありました。4年生だった私が「結局、女の人ががんばらないとね」みたいなことを言ったとき、当時の私の指導者だった先生が「弱者の権利は、強者のほうが引っ張って作っていかないとけない」(当時の理工系の女性の立場を弱者と表現したものです)という趣旨のことを言われ、論されました。当時はそうかなー、と思いましたが、今はその意味が少しわかる気がします。大学教員の仕事はほかの職種の方と比べると、時間のフレキシビリティが高いです。子育てで参画することで、新しい化学に出会うとともに、男女共同参画の先端を行くような学問分野になり、ひいては、大学教員という仕事が様々な人への門戸を開いた学生からみたロールモデルとなるような仕事になるとよいなと思えます。

今回は東京理科大学理学部化学科 由井宏治先生です。同じ研究室の出身で、私と違い科学全般の広ーいネタをおもちの先生です。お楽しみに。

〔中央大学理工学部 片山建二〕